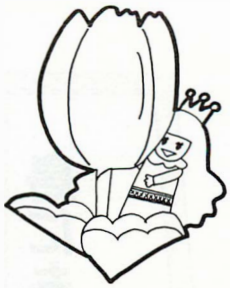


発行/平成2年6月15日　No.17
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

特 島でイキイキ！ 集

○島にも川が流れている
宮本　千里…2
○元気・元気・竹ヶ島
宇都宮秀樹…4
○ろくろにかける思い
村上　俊弘…6
○魚と自然と人情の村で
西岡　勝彦…8
○ひろがれ、留学生パワー！
内藤　久司…10

研修レポ

●「アトリエ野のはな」
坂本ゆりさんを訪ねて……12
●「みんなでやっぺ！」茂木町……14

REPORT

卒論発表会……16
☆あなたのコーナー……19

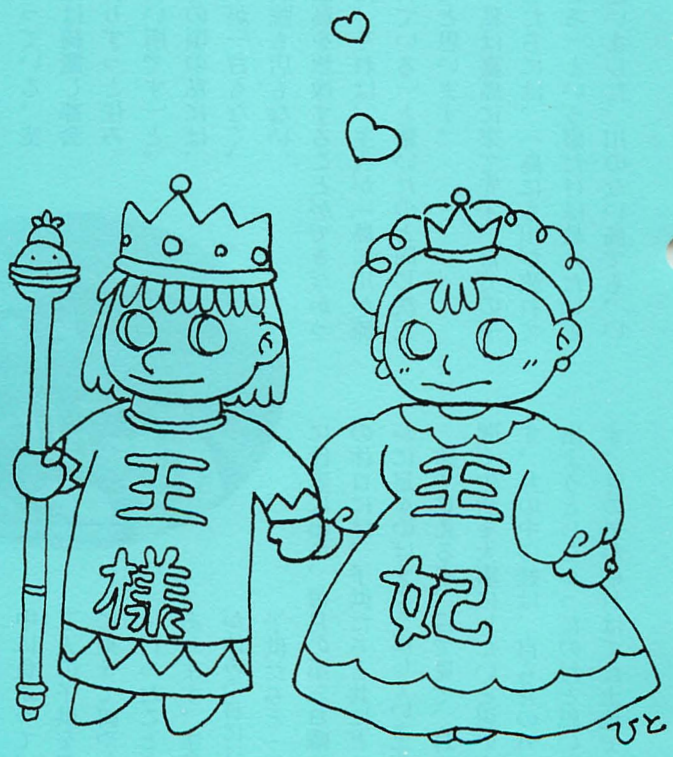
研究会議 News Letter

●地域づくり　学んで三年　よもやま話
ノート　…20
●創造について考える……22
●癒しの里がどこにあるんだ……24
☆TOWN タウンパソコン通信　…25
●御荘湾立て干網の魅力……26

まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 17



特集

島にも川が流れている

宇和島市・嘉島

宮本千里

●島に川が？

島という言葉を耳にして、先ず連想されるのは、「海・船・空・カモメ・波・孤独・閉鎖的…」いろんな角度からみても淋しく、そして演歌の世界です。

私は島という言葉から切っても切れない縁があります。生まれは越智郡伯方島。現在住んでいるのは宇和島市嘉島。人口一万人の島から人口三百人の島に嫁いできたのは十三年前。宇和島市より二十キロメートル沖合に浮かぶ戸数七七戸の嘉島。同じ島とはいえ、バスと車で生活していた伯方島に比べて車の一台もない漁村。生活習慣の違いはもとより、瀬戸内の波静かな伯方島に比べ、男性的でいきりたった嘉島では、人々の考え方まで違い、慣れるまでには相当の時間を費やしました。

周囲四キロメートルしか知らなかった主人が、伯方島を見て先ず驚いたのは、「島に川が流れていた事だ」と言います。一生忘れられないとよく口にします。「島に川が流れている」「あなた、日本だって島なのよ」。

私と主人との出会いは、「離島青年の船」といって、島に住んでいる青年たちが集まり、島での悩み・将来のことなど話し合い研修していく集いでした。私が嫁いできた当時、嘉島小学校全校児童四名、青年団四名、多い時は千人近くいたという人口も二百人にまで減少し、半数以上が六十歳を越える人々でした。

高度経済成長期に一家で嘉島を離れ、大阪に出ていった主人が、Uターン青年第一号として島に一人で帰って以来、今ではUターン青年も二十人を越えました。

私がまだ独身で青年団活動をしている頃、ある集会で、「伯方島です」という自己紹介に、「えっ島に電気はついていますか」と聞かれてムッとした思い出があります。

私は胸をはって言いました。

「国道だってあり、バスも車も走っている。空気は綺麗し都会よりずっと住みよい所です」と。

その頃の私には、車が一台もなく、病院も店もない孤島を想像することができなかった。それは、主人が「島に川が流れている」と驚いたのと同じ次元だと思います。

私は嘉島に来て先ず、自分の子供たちには、「島にも川が流れている」という事だけは教えたいと思いました。川のない島でも、いついかなる所でも誇りを持って、自分のふるさとを嘉島だと自慢できるようにと。そうしていくのは私たち夫婦の生き方にかかっていると思います。

俺たち兄弟妹（きょうだい）

●楽しく上り坂を行く

私の家ではハマチ養殖をしています。主人と二人の二人三脚です。子供が小さい頃は一人を背中に負ぶって、三人の子供を船に乗せて餌やりに行ったこともあります。学校が休みの日には、子供たちと一緒に仕事に出て、毎月の第三日曜日の休日には、子供たちと共にどこかに足をのばすようにしています。

体で覚える事、目で見て、耳で聞く生活を大事にしたいと思います。井の中の蛙は、自ら井の外に出ようとしなかったのだと思います。井の外が枯れはてた土地でも

冒険をしようとする気持ちがない限り進歩はないと思います。

嘉島では戸数七七戸の半数以上が養殖業を営んでいます。上り坂を一歩一歩ふみしめている嘉島では、今年度も消波堤による新しい養殖漁場が完成し整然とイケスが並べられ、港も目にみえて整備されています。小学校全校児童も毎年増え続け二十一名となりました。

どんな小さなことでも明日のことに繋がるならと漁協婦人部では声高らかに、浜そうじ・せっけん推進運動を呼び掛けています。先日、宇和島連合婦人会から頂いて帰った「芝桜」をちびっ子広場と小学校に植えました。私たち婦人会にできることは婦人の手で、明日の島の未来づくりに何らかの形で役立つのなら、上り坂を行くのは楽しいことだと思います。

下り坂は早くて楽、上り坂は誰でもつらい、でも今は頂上のない山を登っていく時のような上り坂に嘉島は挑戦しています、私はそういう嘉島が大好きです。

●島で生き生き

私は島に生まれ、島で暮らしていることに感謝しています。なぜなら、嘉島は人の一生にたとえると「青春」だからです。

人は年令とともに老いるのではなく、理想を失った時に老いが来ると言います。希望ある限り人は若い。希望ある限り青春だと言います。島で生き生き暮らすことは島を生き生きさせる事。行動が伴わなくても演歌の世界ではなく、エイトビートの曲を歌い続ける事だと思います。

宮本千里さんと
お子さん達

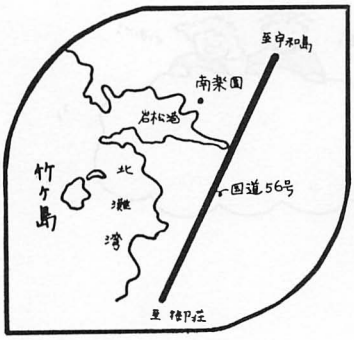
特集

元気・元気・竹ケ島

津島町・竹ケ島

宇都宮　秀樹

宇都宮　秀樹さん



●はじめに

「竹ケ島」といっても中々お判りになりにくいかと思いますが、周囲は約四キロメートル、世帯数は三十、人口は百人余りで、津島町では唯一の島です。四季を通じて美しい自然に恵まれているのは大変嬉しいことです。春にはアジ・イサキ、夏にはアワビ・サザエ、秋にはタチウオ、冬にはアジ・モイカと新鮮な魚介類の宝庫で、漁業を主体とした島です。農業は全くといっていいほどありません。

昭和三十九年頃から始まった真珠養殖も、十年程前から好調です。そのおかげもあってか、年を追うごとに若い人が増え、今では後継者も多くて島は活気にあふれています。いつの世でも若い人が多くいるということは、心強いかぎりです。卒業と同時に家の仕事を手伝ったり、都会からのUターン組も少なくありません。

●青年と島の諸行事

私は島の中で区長という大役を仰せつかっていますが、小さな島であればある程、若い人に寄せる期待には大きいものがあります。期待することは勿論のことですが、それを周囲の人がバックアップする姿勢が、あることはいうまでもありません。ですから、島の諸行事を運営していく中では、青年団の活動というものが大きな比重を占め、島の発展のために協力してくれています。

それではここで島の年中行事と青年団との関わりを挙げてみます。

二月には学芸会がありますが、児童が少ないため婦人会・PTA青年団の人たちによる歌や踊りがあります。特に、漁業後継者による寸劇はすこぶる定評がある程です。

七月十四、十五日は、下灘祭りがあります。十四日の夜は花火大会、十五日には和舟競争が行われ地区別で紅白に分かれて、昔ながらの「櫓」を漕いで速さを競います。竹ケ島からも三名の選手を出して、六月末から毎日練習に行きます。

八月の盆踊り大会では、青年団手造りの煮豆やかき氷のバザーがあり、婦人会の踊りの輪とともに楽しいひとときを過ごします。

十月には秋季大運動会があります。幼児からお年寄りまで全員参加。島を挙げての大催しです。仮装行列、ビールの早飲み競争、年代別リレーなど、島人みんなで一

致団結して頑張っています。

また年に三・四回あるソフトボール大会にも熱が入ります。仕事が終わると、狭いグランドではありますが、練習に打ち込みます。たまに民家の窓ガラスを割ったりすることもありますが…。その練習のせいか、優勝、準優勝などの輝かしい成果を残しています。

●不便なこと困ること

島であることで、やはり困るというのは急病人が出た時でしょうか。定期船が無いために多くの家庭には自家用船があります。昼間ならまだいいのですが、夜間や海が荒れている時などは大変です。

それから、島には商店・スーパーマーケットなどもありませんので、週に一回の休日には自家用船で一週間分の食糧を買いに出かけます。雨が降っている日などに沢山の荷物を船に乗せたり降ろしたりする時には、「陸続きだったらいいのになぁ」と思うことも何度かあります。

島にとって船は大事な足ですから、冬の荒海にも出航できるように丈夫な船が必要となります。そのために莫大な経費がかかります。

島であることは確かに不便ではありますが、そんなことばかりでもありません。島以外で住んでいる人から見れば、「大変だなあ」と思われることも多いでしょうが、それは住んでみなければ判らないことなのかもしれません。何処に住んでも一長一短はあります。変えられない環境なら、その環境に応じた暮らし方というのを考えることも大事なことではないでしょうか。

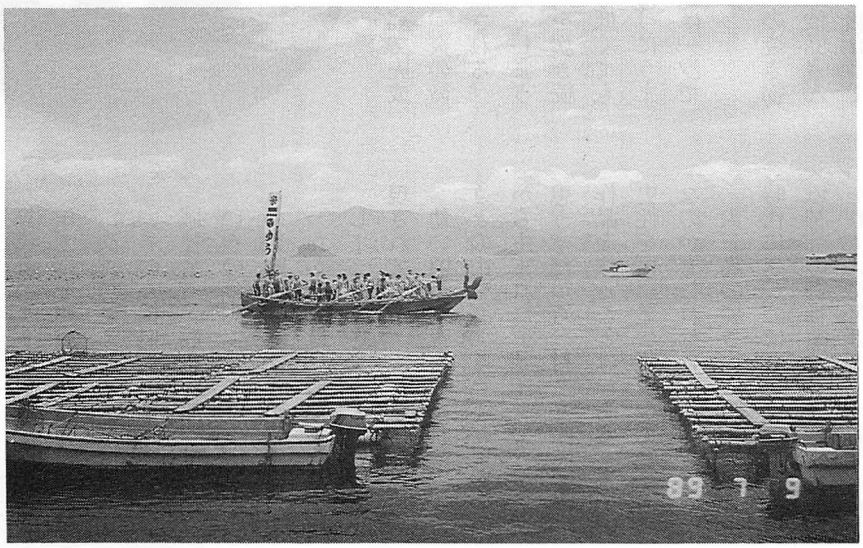
こんな小さな島ではありますが、お互いが協力し助け合って生活しています。正に島全体が一つの家族であるという感じです。

●これから

島に住んでいて思うことは、地理的条件でどうにもならないこともありますが、心まで〝離れ島〟にしてはいけないでしょう。いとも簡単に島を出て他の所へという訳にはいきません。

明日を担う竹ケ島の青年団の人たちは、明るく素直です。もうそろそろお嫁さんをもらって、児童数を増やしてもらえればいいのですが…。

今後、島で取り組んでいきたいことは、自然環境を維持していくことです。母なる海は、島の暮らしの中では直接な関わりがあります。特に、真珠養殖をしている以上は真剣に考える必要があります。海は大自然の命、島は我々のふるさとであるということを肝に銘じながら、頑張りたいと思います。そして、いつまでも若い人たちの活気あふれる島であるよう努力しながら…。



力を合わせて
「櫓」を漕ぐ

特集

ろくろにかける思い

大三島町・大三島

村上俊弘さん

●大三島と言えば…

全国に数ある島の中で、「大三島」と言えば「大山祇神社、国宝の島」ということになるが、これからはもう一つ「水軍焼」を加えてほしい。

まだ衣装を身につける前の白い肌をした焼き物たちが、日光浴をしている。じっと見ていると会話が聞こえてきそうで、かつての水軍を思わせるような錯覚に囚われてしまう。鎧や船、魚・鳥・光・波があらゆるところに表現されている。一目見た時から素朴で大胆、まさに「水軍そのものだ」と感じてしまった。

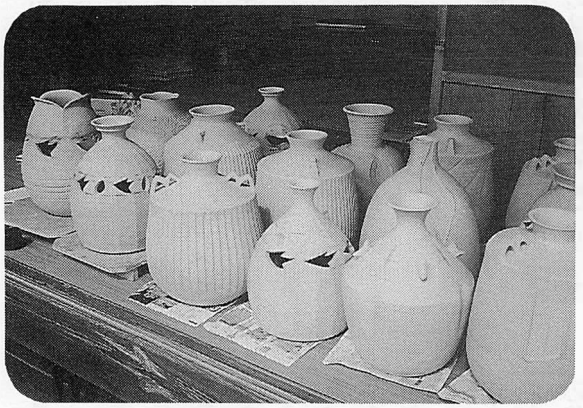
何故かしら「水軍焼」に郷愁めいたものを覚えたのは何だったのだろうか。焼き物たちの住んでいる風景が自分の生まれ育った島と同じような風景・環境に共通項を見たのかもしれない。

焼き物は、土をこね、形を作り、薬を塗って焼くまでには大変な労力を経て完成する。色あいというのは、炎の微妙な変化によって作り出される。

いったん窯の中に入れてしまうと、二昼夜寝ずの番で火を炊き続ける。温度が高すぎても低くてもうまくいかない。それだけにうまく出来上がった時の喜びは一汐であると思う。

今回、愛媛の島で唯一の焼き物をしている大三島の村上俊弘さんを訪ねる機会を得たので紹介してみたい。

静かに窯入りを待つ



村上　俊弘 さん

●熱き思い

村上俊弘さんが全国のあちこちで修業をして、生まれ故郷の島に帰ってきたのが昭和四十六年で二十四歳の時だった。

次男坊であれば島には残らないものと相場がきまっている地域社会で、敢えて帰ってきたというのは、ふるさとへの熱い思いと陶芸に対する熱い思いがあったからではないだろうか、そして、その形が焼き物の中に表現されている。

幼い頃から育んでくれた、ふるさとの山や海、そして歴史性の中から生まれたデザインでもあると思う。だから、村上さんにとって作品を作ることは、ふるさとや歴史性を再認識し確認していく作業なのかもしれない。

大三島の焼き物の歴史は、弥生時代にさかのぼり、その後、大山祇神社の御神窯で社用の土器が焼かれていただけで、以後ほとんど焼き物の歴史はない。

村上さんはこの地に、独自の焼き物を生み出すため、中国の宋時

代に最も多く焼かれた河南天目を大三島から産出する良質の原料をもとに作り出した。昔から焼き物にとって大切なのは、一に土、二に焼き、三に細工と言われている。

島に帰って一年間は、原料を探して山野を歩きまわり、土や石を持ち帰っては分析し、試し焼きをしたけれども、失敗の連続だった。

ある時、何げなく読んでいた本の中に、大三島は昔からピンク色をした長石が産出されるというので探したけれども見つからない。あきらめてのんびりと釣りをしているとピンク色の小石があり、近くのほら穴の中で発見することができた。鉄についても、ある雪の降る朝、山道の石垣で「鉄が混っている石と土」に出合った。さっそく長石と混ぜ合わせて試し焼きをしたところ、見事に発色し窯変していたという。そしてそれをガス窯で焼くには満足できなくなり、自力で「穴窯」を完成させた。

以来、燃料となるマキ割りから作品づくりまで徹底したオリジナルである。「水軍焼」と名付けたのは、大三島を根拠地に、瀬戸内海から世界へと広い視野を持ち、生き抜いた自らの先祖、「水軍の大らかな生きざま」を投影させる思いがあった。

陶芸活動と共に力を入れてきたのが町の文化協会の育成であった。そして、町で陶芸教室を開いたり、文化財保護委員としての活動、ふるさとの歴史を更に深く研究することに繋がっていった。

特に自ら作陶の技法にふるさとの伝統美を生かすため、江戸時代から伊予の国焼きとして知られた「西ノ岡焼」を研究している。

焼きあがった焼き物たち

●これから

町民を対象にふるさとの歴史や文化に触れる活動をしているのは、「やがて島が橋で結ばれた時、島は道路の一部分になって、その存在感すら忘れられてしまうのではないか」との思いや風化しつつある土着の文化や自然を見なすおことでもある。

さらに、「もう奇抜なアイデアや目新しいもので人を引き付けるのではなく、島独自の歴史や文化が息づく、本物志向の時代が来る」とも。

陶芸活動には、「もうこれでいい」ということは無いだろう。創作に対する意欲というのはどこまでも続く。村上さんの作品には、これからも瀬戸内海の情景が表現されて、益々磨きがかかってくるに違いない。

これからも、あらゆるものに挑戦して、大三島から日本へ、世界へ通用するものを作っていってほしいと思う。

島を離れる時、夕日と海が美しく輝いていた。村上さんもきっとこの夕日と海を前に、新しい考えをめぐらしているだろうと思いながら、白い航跡に続く大三島を見ていた。

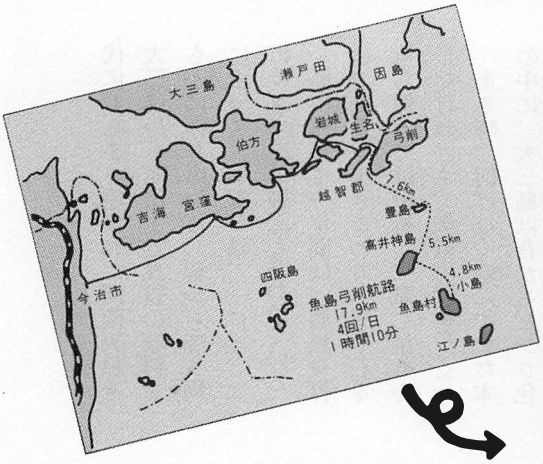
取材／豊　田
（ルパン）

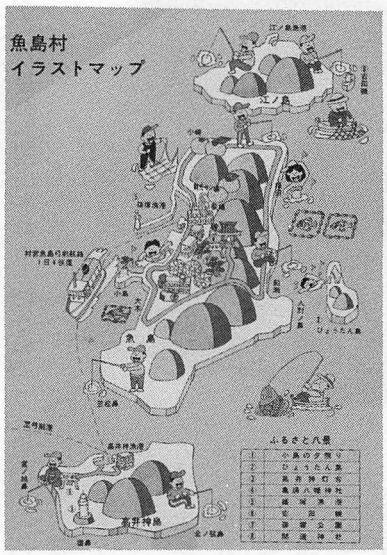
特集

魚と自然と人情の村で

魚島村・魚島

西岡勝彦





●鉄道マンから転身

『魚島』。聞いた事はあるけど一体どこに？。「舞たうん」の読者の方は勿論、名前は知っているでしょうが、正確な位置までは知らないという方がほとんどでしょう。

私も四年前までは、そういう一人でした。当時、国鉄職員だった私は、合理化と民営化の波に押され、地元である今治駅を離れ高松車掌区へ。片道一五〇キロメートルの通勤、二泊三日の勤務など時には五日くらい帰れないこともありました。

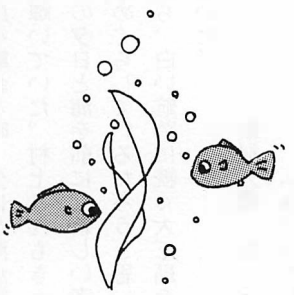
ある日、業務が終わって車掌区へ帰ってくると、掲示板に気象庁や大蔵省の求人と一緒に、魚島村のがありました。その場ですぐに上司へ申し出たのです。

後日送られてきた資料をもらい妻に相談したところ猛反対。泣く妻に、「もう申し込んだので止められない」と説得しました。希望者が私一人でもあってか、部内の選考もなく、面接のために魚島村へと出かけた訳です。

魚島の印象は、「建物がスゴイ」の一言でした。桟橋前に建つ六階建ての離島開発総合センターや役場庁舎など、漁師町らしくない清潔さに驚きました。

やがて話はトントン拍子に進み昭和六十一年十月より半年間、研修のため出向しました。九年間勤めた国鉄がJRに変わった昭和六十二年四月一日、魚島村役場に採用されました。同時に、島部消防事務組合に出向し、魚島駐在の消防士として現在に至っています。

島で暮らしはじめて早や四年目。当時、二歳だった長男も四月から一年生。島に来て誕生した長女もこの八月で二歳。最初は退屈していた妻も、毎日大忙しのようです。



●ユニークな村づくり

魚島村でやっているユニークな事例を二つほど紹介してみます。

①全戸に下水道完備

平成元年度から五年度までに、総事業費五億円をかけ、魚島と高井神島に「し尿処理施設」を建設し、全戸に下水道を完備するというもの。この完成によって、高齢者には重労働だった汲取りが無くなり、より快適な生活ができると、お年寄りは大喜びです。

②新婚住宅

現在、魚島に四階建てで十戸入居できるものがあり、今年さら

に高井神島にも二戸新築中です。この住宅には入居条件として、新婚さんでないといけません。若夫婦で水入らずの生活ができると大好評です。

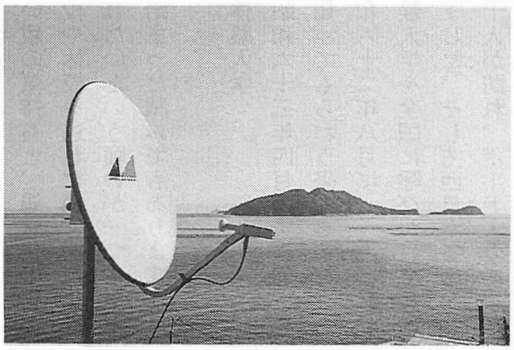
●魚島ＣＡＴＶ

私が今かかわっている仕事でＣＡＴＶについて書いてみたいと思います。

魚島の集落は、島の北側にあるため昔は愛媛県でありながら、愛媛県の放送は受信できませんでした。このため、昭和四十七年に魚島・高井神島両島に共同アンテナを建てたのがＣＡＴＶの最初です。

昭和五十六年には、自主放送の「うおしまテレビ５チャンネル」が開局。何度か改修を重ねてきましたが、ケーブルの老朽化が目立ちはじめ、映りが悪くなっていました。そこで、ふるさと創生の一億円の一部を利用して全面改修し完成しました。

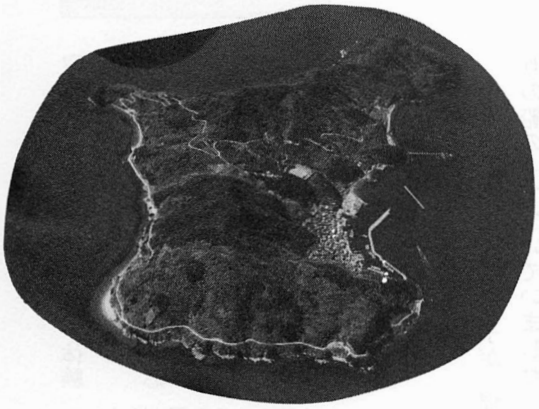
高井神公民館から望む魚島



このＣＡＴＶの内容は、中四国の民放六波とＮＨＫの地上波二波、そして衛生放送二波の再送信と「うおしまテレビ」の計十一チャンネルを見ることができます。これは最近はやりの都市型ＣＡＴＶでも、一般の放送をこれだけ受信するのは困難なことで、瀬戸内海のド真中に位置する魚島村だからできることです。

また、今回新しく双方向システムを導入し、映像を一方的に送るだけでなく、家庭からも映像や情報を逆に送れるようになりました。これを利用して「うおしまテレビ」の生中継や水道メーターなどの自動検針にと、今後期待されているニューメディアであります。

さらには、魚島と高井神島を無線で結ぶ計画があり、「うおしまテレビ」の同時放送など、益々夢のふくらむＣＡＴＶです。自主放送の「うおしまテレビ」では、毎週金曜日の午後五時から定期放送を行っており、村の行事やニュース、広報などを放送しており、高視聴率を誇っています。



魚島

「うおしまテレビ」では、皆さんからの映像を募集しています。８ミリ、ＶＨＳ（ＳでもＣカセットでも）、βでも、魚島の人に紹介したいものがありましたら何でも結構です。是非送って下さい。

●おわりに

最近、越智郡の島々ではリゾート計画が目白押しのようですが、魚島村では今のところ、これといった計画もなく橋も架かりませんが、魚と自然と人情があります。

瀬戸内海のおいしい魚を食べてもらおうと昭和六十二年には、村営の民宿「観光センター」を建設し、中国や阪神方面からのお客様を中心に賑わっています。皆さんも是非おいで下さい。

これからも、この美しい瀬戸内の小さな村を、素敵なところにしていくよう努力したいと思っています。自分自身のためにも。

特集

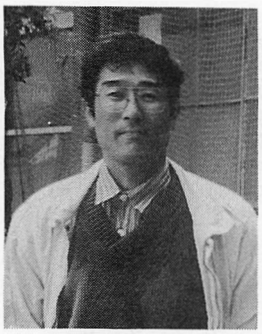
ひろがれ、留学生パワー！

中島町・野忽那島

内藤　久司

小さな岬を回ると、大きく両手を広げたような湾に、船はすべるように入っていく。船を下りると目の前にある学校からは、明るく元気のよい歌声が聞こえてきます。ここが、全校児童十三人の野忽那小学校です。

野忽那島は松山市の沖合に浮かぶ周囲六キロメートル、人口三百五十人のみかんと漁業で生活している、「瀬戸内海シーサイド留学」のある島です。



内藤　久司さん

●留学制度スタート

昭和六十一年、当時ＰＴＡ会長をしていた私は、慢性的な児童数不足を何とかしたいと考えていた矢先、山村留学制度のことを知り、島でやれないかと、学校と地域とが一体となった取り組みを始めました。翌年の春には実行委員会もできて本格的にスタートしました。

自然の中でのびのびと育ってほしい親の気持ちと、過疎化の中で廃校や休校を逃れたい、活性化を図りたいという願いが一つになって始まった試みでもあります。

●体験入学

昭和六十三年四月の実施前、島を知ってもらおう来てもらおうと昭和六十二年八月に、一泊二日の体験入学を全国に呼びかけて実施しました。そして西日本各地から四十人が訪れ、ボート・カヌー・海水浴・地びき網・セミのつかみ取りなど都会ではできない体験をしてもらいました。

体験入学での子供たちの反応は「ビルやマンションが無い」と不思議がったり、島の人はやさしくて親切、海がきれいと感激したり印象は強く残ったようでした。

●留学生第一号を我が家で

その中で六年生の女の子が、帰りの船の中で泣いていました。「来年からだと中学生になり、留学できない」というのです。でも、まだ里親などの受け入れ準備のできていない状態です。しかし、何とかしてあげたいと思い、いろいろ相談した結果、テストケースとして我が家で二学期から受け入れることにしたのです。

七人家族の我が家には、小学六年生の長女を頭に次女、長男と三人の子供がいますが、留学生の萩原真琴さんを入れた生活が始まりました。

彼女は活発で明るく積極的な性格の持ち主で、我が家は勿論のこと学校や地域で真琴旋風をひきおこしました。七ケ月間で彼女は、次のように言っています。

「大変良かった。野忽那島には海や山の自然がいっぱい。その自然に親しめ、都会のような競争がなく皆んなと仲よくできるし、一人一人に出番があってやりたいことや好きなことを思いっきりやれることがいいです。…これから留学してくる子はいいなあ。もう一年…帰りたくないな。でも半年間でも留学できて、一生の思い出となって良かった。」と。

内藤さんのお子さんと留学生の萩原真琴さん（右はし）

私たちも真琴さんを受け入れ、やがて心を開いてくれた時の感動は、里親として何ともいえないものがありました。初めての同級生を持った長女も、良き友としてライバルとして刺激を受けたようです。魚釣り・みかんもぎ・運動会・学芸会・遠足・音楽会・卓球大会・マラソン大会など…。留学生第一号としての彼女の様子は、テレビや新聞で取りあげられ大きな反響を呼んだのは、まだ記憶に新しいものがあります。

たった七ケ月の子供でしたが、今でも「内藤のお父さん、お母さん」と言って電話をかけてきたり野忽那島を第二の故郷として我が家に来て、きれいな海と潮風など満喫して帰っていきます。

●留学制度で気づいた点

本格的に始まった昭和六十三年度は八人の留学生を迎え、全校児童は一挙に十八人と倍増。島は活気にあふれ賑やかになりました。平成元年度は五人。現在では十三人の留学生を送りだしています。

今年は二年目を迎える二人に加え三人が、元気な留学生活をおくっています。

三年目に入ったこの留学制度を振り返り、気づいた点をいくつかあげてみると、

(1)可愛い子には旅をさせよの言葉があるように、親と子が一度離れることにより、お互いが存在を見つめ直す良い機会になっています。

(2)子の親離れより、親の子離れの方ができにくいようで、心配されるホームシックも克服し、自然の中でたくましくのびのびと成長しているようです。

(3)大規模校ではなかなかできなかった校長先生と身近に話しをしたり遊んだり、先生に手をあげて当ててもらったりと常にスキンシップができる事など、自分の存在を見てくれることが嬉しいようです。

(4)留学生の刺激を受け、今まで少なかった積極性や競争意欲が島の子にみえはじめたこと。

空から見た我が野忽那島！

(5)一方、留学生を預かっている里親の気づかいには大変なものがあり、毎日が楽しく規則正しい生活になったようです。

●新たなる出会いを求めて

行政指導でなく、学校と地域が手をとりあって始めたことですが、年を追うごとに地域に根づき、都会と島との交流は深まり広がっています。

他の島々が、観光・リゾートというのに対し、自然とのかかわりを重視した取り組み。今以上に自然を大切にし守っていくことの思いを新たにしています。

まだまだ試行錯誤が続くと思いますが、時おり訪ねてくる巣だった留学生たちとの心のふれあいを大切にし、新しい人たちとの出会いを楽しみにしながら、もっと充実していきたいと思います。

＜連絡先＞
791-44 温泉郡中島町野忽那
野忽那小学校
TEL（〇八九）九八－〇三三〇

（研修レポ）

「アトリエ野のはな」坂本ゆりさんを訪ねて

(財)愛媛県まちづくり総合センター
宇都宮　正　昭

今日は四月二十三日。今まさに満開のさくら・サクラ・桜!!想像はしていたものの実際に目の前にすると、つい感激するものだ。我々三名（石川チーフ・久保田・宇都宮）が訪れたのは、東北・岩手県…。三日間の研修中、各地域で多くの方にお会いした中で、今回は紅一点の「坂本ゆりさん」にスポットをあててみたいと思う。

県都・盛岡市から車で約二時間半の所に坂本さんが活躍されている岩泉町がある。面積が本州で一番広い町であり（香川県の五割強の面積人口は約一万七千人

坂本さんを簡単に紹介しますと、現在「アトリエ野のはな」で、ドライフラワー作りによる、町おこしに貢献されている方です。

まず地域を知ることが大事であるということで、日本三大鍾乳洞の一つである名所龍泉洞を案内していただく。（洞内の湖水は透明度四十一mで世界一を誇る。ほんとに神秘的でしたョ）

☆「アトリエ野のはな」の生いたち

案内を受けながら「十年程前の獣医の主人とこちらに引っ越してきた時は『日本のチベット』と呼ばれていた。」とその当時の印象を語られた。その理由は、

①「龍泉洞」の字句と同じで暗い。
②深い山間・狭谷ばかりで気が重くなる。
③外部との交流が少なく、そと者を受け入れにくく排他的感情が強い。

このような暗いイメージをもち、落胆の日々を送っている時に、スイス人神父のことばに触発され、今まで見えなかった「山」「空気」「水」の恵まれた自然環境の良さを認識して『日本のスイス』と発想の転換をした。

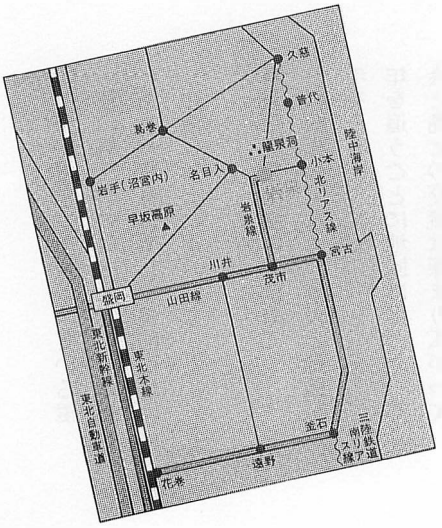
東北の地は寒気が厳しく花が少ない。そこでドライフラワー作りを始めようと決心して、どこでも群生している「ムギワラギク」の栽培を始める。（しかし背には住民の冷ややかな視線を感じながら…。）販路は短大時代の先輩の助力もあり、次第に拡大していく。

昭和六十年中小企業庁の村おこし事業に岩泉町が指定されるのを契機として、ドライフラワーが選定される。徐々にフラワー教室の開催等で地区住民にも浸透していく。この様な経過の中で、ドライフラワーづくりを仕事として手掛けたいという人達が集まり、昭和六十一年に「アトリエ野のはな」が誕生したのである。

案内されて行くと、外観はお世辞でもきれいとはいえない建物であるが、二階では所狭しと作業されている女性の歓迎を受けた。「まず資本金は十五億??実は十五奥（十五人の奥さんの集まり）ですよ」と坂本さんに一本とられてしまった。

―・―・―・―・―・―

彼女のこれまでの苦労話やまちづくりの考え方を要約すると、



☆テーマは、

「愛」と「夢」と「一粒の種」

「人は、人間同志の愛情とか郷土愛とか色々な愛情に支えられ生きているが、将来の夢・希望をもち、目標に向かって、ひとつから実行していく事が大切ですよ。」と実際に花の種をまかれた坂本さん。

☆チームワーク

「工房」の仲間は全員が主婦であるが、花の栽培から加工・販売までのシステムを各々チーフ制をとり運営している。「仲間・住民・行政の方・県内外の色々な分野の方に恵まれて、今までやってこれました。」と、謙遜されながらチームワークの重要性を強調された。

一方、家族のチームワークもバツグン。ご主人の話になると「以前は石坂浩二もまっ青という程男前、今はデブ男。」と愛情一杯のおのろけぶりだった。

龍泉洞にて

←「アトリエ野のはな」

☆夢多き少女

「商品作りにおいても今のトレンドに乗るのではなく、自ら新しいトレンドを創りたい」と意気盛んである。また、「最近自然派志向が注目されているが、今後は花を媒体として平和志向を創造したい」と情熱家であり、大きな夢がある。しかし「ドライには花の魅力である、『香り』がほとんどありません。よって香りを注入して五感に訴える商品の開発をしたい。」と現状を容認しないで、開拓しようとする気概には感銘を受けた。

☆人生教訓〔曲がり角・迷路に挑戦〕

坂本さんはモンゴメリの「赤毛のアン」が好きらしい。アンは曲がり角を曲がったら何かがあると思い、いつも希望をもって生きていた。この何かを坂本さんは、色々な方との出会いと解釈している。このことはまちづくりの原点「ネットワーキングはフットワークから」に共通している。

もうひとつの「迷路（ラビリンス）は幾ら悩んでも最後には必ず出口が見つかります。プロセスは困難な程成果は大きいですよ。」と。拝見していると、敢えて曲がり角の多い迷路に突入しているのが推察できる。

☆女性の人材発掘

「地域の女性にも地道に活動されている方が多数いらっしゃる。この人材を発掘し得るセンスを自治体が持ち、そして激励してあげるべきと思います。」確かに女性の地位向上に伴い社会進出も著しく、今後アメニティ作りを支えるのは女性…。いわゆる男性は職場を中心としたタテ社会で生き、女性はヨコのネットワークで生きている。今後は益々活動者も多くなろうし、人材を発掘し意見を述べる場づくりが必要であると思う。

―・―・―・―・―・―

以上、長時間に亘り、少年のような夢多き坂本さんの経験談・アドバイスを受け、我々は岩泉町のあれこれ余韻に浸りながら盛岡市へ連がる早坂高原（端々に残る雪に感嘆しながら）を後にした。

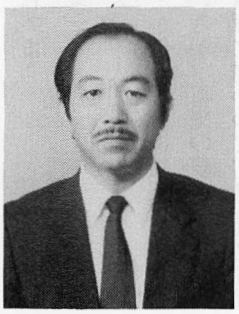
●研修後記

四月からまちづくりのお手伝いをすることになり、予備知識なく不安なまま参加したが、町づくり人は概して気さくで情熱家が多く安心した。今後は、異業種の方との出会いを通じて、今までの固定観念に捉われず、町づくりの一助となるよう活動したいと思う。

（研修レポ）

「みんなでやっぺ！」　茂木町

(財)愛媛県まちづくり総合センター　山岡　強



田村　幸夫さん

街中を流れる逆川に、春の陽差しが照り返し、八構山系の新緑が澄んだ青空に映え渡る。

今回私が県外研修で訪れた茂木町は、栃木県の東南に位置し、町内を縦横に流れる逆川、那珂川の清流が周囲の景色と調和して美しい景観を形づくっている面積百七二・五二㎢（山林地域七〇％）、人口一万九千人の山間の町である。

その昔、この逆川には一メートル近い鯉が無数に泳ぎ、町内や他から訪れた人々に親しまれ名物になっていたと云う。

そして現在…。

△農村出会い塾

全国には「まちづくり」を真剣に考えている人・グループがたくさんいるが、一体何が「まちづくり」なのか？　何をどうすればいいのか？　試行錯誤している人は意外に多いと思う。そんな中、茂木町での「まちづくり」は確実に展開されている。

町内同志の交流は勿論の事、他から訪れる人達も含めて交流することにより、新しい発想の展開と新しい文化を創出する事を目的として、昭和六二年に開講した〝農村出会い塾〟がそれである。

①はみだし人間であること
②ノリやすい性格であること
③不良であること
④酒が好きであること
⑤女（男）が好きであること
⑥好奇心旺盛であること
⑦何か特技があること
③一応職業を持っていること
⑨茂木が好きであること
⑩まちづくりに関心があること

以上の要件の一つ以上を充たしていると自負する者が塾生の資格である。一見物静かに見えるこの茂木で、この様なユニークな発想と行動力を持った塾生達の活動が町の動脈になっていることはいうまでもない。

△元気アップ、もてぎ

「元気なまち」にする為には、どうしても関わりを持つ住民と行政のミゾを埋めなくてはならない。その両者の「協働のまちづくり」を目指したのが、第三次総合開発計画〝元気アップ、もてぎ〟である。

昭和五八年から町内各地域で座談会を行い、役場職員が手分けして出かけて意見を聞くことにより、住民と行政の間に強い信頼関係をつくり、自分達の手で作りあげる〝元気アップ、もてぎ〟。町全体がこのプラン実現のために、今、意識を高揚させているのである。

基本講想に基づき出来る所から実行すれば、やがて土地をおこし、産業をおこし、人をおこす。そして茂木は町をおこして、未来をおこすのである。

△命の逆川

茂木町民の暮らしを支えて来た逆川に、県が河川公園を造ったのも昭和五八年の事だった。その後の維持管理の悪さで雑草が繁茂し、鯉も観賞できなくなったこの状態に嘆いた約四〇名の若いグループがあった。商工業者を中心に構成されたこのグループは「明日の茂木を考える会」と称し、放置された河川公園の除草をしてチューリップを植えたのである。一連の仕掛人でもある茂木町商工観光課長補佐（当時農林課）の田村幸夫さんは、「あの奉仕活動を通じて、行政と民間の仲間意識が強くなった」と当時を振り返る。

逆川は甦り、昔の様に人の集まる川を見た会員にとって、ミゾを踏越えた協働のまちづくりの大切さを知ったのは大きな収穫でもあった。

更に、茂木町民の心をより強く

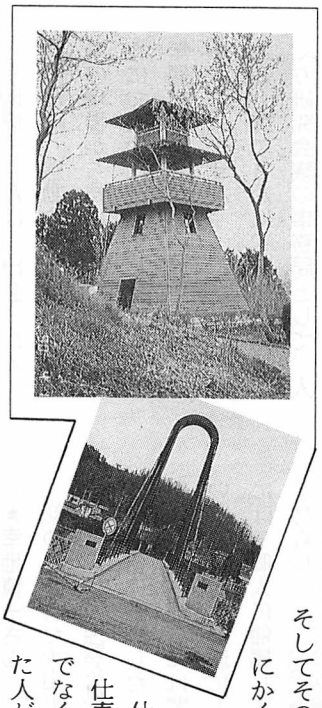
昭和61年の集中豪雨で

一つにする出来事が起きたのは、当時「明日の茂木を考える会」の会長をしていた阿部武史さんが新町長になってわずか十六日目の昭年六一年八月五日の事だった。台風十号による集中豪雨で逆川は大洪水となり商店街は水没、電話不通、道路寸断、泥水の中に崩壊した茂木町で、役場職員は復旧作業を役場以外の所から行い、約一ケ月間住民の為に汗を流したのである。強い郷土愛、そして住民と行政の連帯感は、この運命の出来事により本物の絆になったのである。

△誇れるまちづくり事業

その年から、〝誇れるまちづくり事業〟として逆川の河川改修工事が始まった。この改修計画の策定に際しては住民も参加し、安全性の確保を基本に潤いのある環境、親水性確保に配慮している。逆川沿いに六のゾーンを設定し、十四の橋の架け替えに際してもデザインを一新するなどしている。それに伴い河川美化運動への取り組みも行われ、その中の「茂木の川を綺麗にする基金」では、六年計画で七千万円を造成し、①家庭内排水処理の推進PR②水と親しむイベントの開催③清掃活動への支援④水中動植物の育成に使うことが計画されている。

あの一メートル近い鯉のいた逆川が、現在生まれ変わろうとしている。そして誇れるまちづくりに今日も一歩近づいているのである。



△躍動する〝もてぎ〟

町のシンボルに「城山」があるが、町の管理に任せられないという住民が「城山を考える会」を結成し、その一角に「やぐら」を作ってしまった。更に本丸跡に城を造ろうという計画もあがっている。新しいシンボルが生まれるのも、そう遠い日の事ではなさそうである。

その他には、農家の生産意欲の向上を狙った「しいたけ教室」や「貸し別荘」に住み付いた陶芸家により「茂木焼」等が生産されている。そして全町の九七%が加入している町有の「CATV」については他にあまり例を見ない事であった。

茂木にはこれといった施設はないが、人、町全体が躍動している。

そしてそのやり方がとにかく面白いのである。「これは企画の仕事、商工の仕事と分けるのでなく、気の付いた人がやらなくてはいけない。」とは前出の田村幸夫さん。

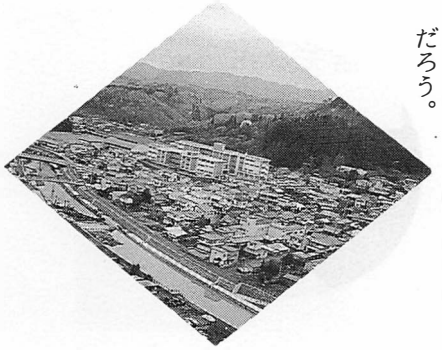
△そして「みんなでやっぺ！」

元古沢地区は出稼ぎが多く、畑は荒れ、地域のコミュニティーのなくなった事を嘆いた地元の高齢者が、お金を出し合って「ゆずの里」を作った。組合の合言葉は勿論「みんなでやっぺ！」である。

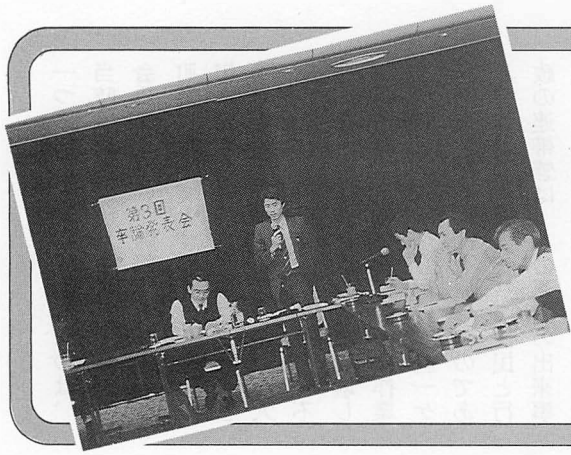
とにかくみんなでやっているのである。住民を巻き込んだ行政の〝協働のまちづくり〟はすばらしいものであった。

茂木町民の暮らしを支え、歴史をつくり、数々のドラマを繰り返して来た逆川は、現在河川改修工事中である。その工事が完了した時、また新しい歴史が、そして新しい「まちづくり」が生まれるのである。

研修を終え、茂木を去る私の車の右手に見えた逆川は、今度私がこの町を訪れる時、生まれ変った姿を見せてくれるに違いない。しかし、いつまでも変わらないモノが一つだけある。それは大水害にも流れる事のなかった茂木の人の心である。そしてその心はきっと再び温かく私を迎え入れてくれるだろう。



美しく変わる逆川



感動さがしの二年間

(財)愛媛県まちづくり総合センター
研究員　豊　田　　渉

†はじめに

幸地慎一さん、井上謙二さん、その後もお元気でご活躍のことと思います。卒論発表会では、二年間の研究成果の発表ご苦労さまでした。いま静かに目を閉じてみると、すぎさった日々のことが懐かしく思い出されてくることでしょう。長かったようで短かったかもしれませんが。

幸地慎一さんは、出会った人、訪ねた町、感動する言葉とか、農業の現場から特に感じたことを中心にお話いただきました。この二年間は感動さがしの旅であったのかもしれません。

井上謙二さんは、えひめ地域づくり研究会議の事務局として、人間ネットワークの要をやっていただきました。話の随所に人と人とのつながりが大事という話をされました。先進地には必ず先進的な人がいるということも。

†始まり始まり

それではこの辺りで、当日の様子を思い起こしてみましょう。

幸地さん、井上さん緊張していましたね。まずは、守谷和久さんから開会のあいさつでした。

「外は花曇り、桜でも見にゆきたいな。まちづくりセンターも五年目に入り、水平飛行でなく、パワーアップで上空へ……」

いよいよ本日のメインイベントの始まり始まり。

★幸地慎一さん

初めて訪れた大山町と下郷農協。農業によって地域が見事に生き残っている姿に感動した。

仕事がら経済には関心を持っていた。経済は地域にとって最終的には、個人に帰属して生活の糧をもたらし、豊かで潤いをもたらすものでなくてはならない。目まぐるしく変わっていく流行・人・物・金・情報を一極集中させている中央からもたらされる知識の断片からは、方法論の参考にはなっても、決して本物づくりはできないことを、お会いした人や地域から学んだ。残念ながらこの二年間、地域づくりの活動で頑張っている農協マンになかなか出会えなかった。

⇦ 下郷農協

農協が今一番求められているのは、地域社会に何ができるか、地域にもっと関心を持つことであろうと思う。センターで経験したことをお話しながら、わかりあえる仲間を少しずつ増やしていくこと以外にはないと考えている。

地域の産業や経済を地域づくりの中で考えようとする時、忘れてはいけないのが「役割り論」

幸地さん

である。このことを理念的に考えていただいたのが、目的・戦略・戦術という五十崎町の亀岡徹さんで、全ては素敵な町をつくる道具であるという道具論。とりわけ、組織の中で目的と手段がいつの間にか解らなくなっている。このことは、農民のための組織を標榜し、営農と生活を守ることを看板にかかげながら活動している中で、いま、自己疎外を起こしかけている農協にとって、本当に心すべきことであろうと思う。

これからまだまだやらねばならないことは、無限にあることだけは痛感している。農協にあっても、魅力ある地域を創っていくための

大山町役場

ネットワーキングの一つであるということを忘れずに、私自身のライフワークにしたいと思う。

★井上謙二さん

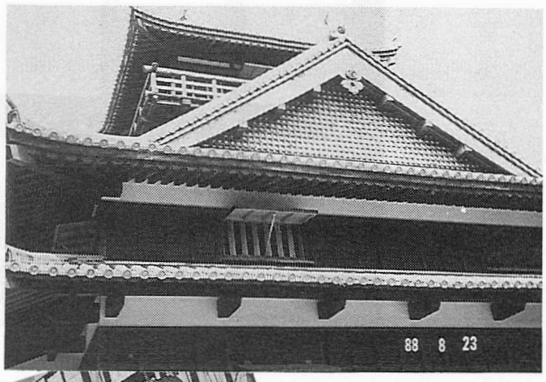
センターに来て先ず感じたのは、地域づくり・まちづくりなどと言い方が様々なように、捉え方も実に様々であるということが、非常に頭の痛いことだった。

最初の半年間は本を読んだり話を聞いたり。一つのふんぎりは、交流研修ツアーで宮崎県綾町（あやちょう）に行った時だった。

こういう町を目指すんだというコンセプトの大切さと、コンセプトをもとに住民や職員がそれぞれに自分なりのやり方で、町を良くしていくという姿を思い、地域自治というか、その考え方に触れたように思う。その辺りから私の地域づくりへの切り口が少しずつ見え始めた。

鹿児島県鹿屋市の「南方圏交流センター」では、代表の加藤憲一さんから国際交流という異文化と接することによって見つめ直し、新しい農村社会を作り上げていくという大きな思想に触れた。

そのためのキーワードはあくまでも「人」であり、自立した人々によって経済的自立を目指していき、最終的には自分サイズの生き方を作り上げていくという大きい明快な理論に驚かされた。アメーバとしての組織論を、それまでにもいろいろな形で聞いたり考えたりしていたが、その時、具体的な例として解りかけたような気がしている。



綾城

南方圏交流センター
加藤　憲一さん

長野県飯田市では、「美しい心の人が住むまち飯田」の示すように施設のたぐいは殆ど見なかった。それぞれの地域を人・物・環境といったことを重層的に考えながら住みやすい地域をそこに住んでいる人々が自分たちの手で作り上げていくことが「複合集落経営」の

理念である。

一人一人が地域や自分のまちにどれだけ関心を持つことができるか。そういった気持ちが、必ず日々の暮らしや仕事の中で生きてくると思う。

これからは、行政職員として与えられた職場で、心豊かな町になるよう仕事をしていくべきだと思う。そのために、行政の役割を考えていきたい。

卒論発表会に
向かってタイプする…。

↑えっ！前日よ！

†終わりのない旅

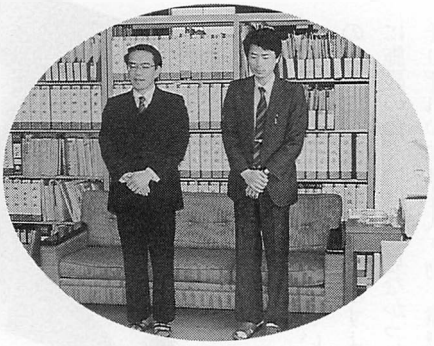
この後、駆け付けていただいた方々から、忌憚の無い質問や意見が会場内を飛びかいました。その受け応えはさぞ大変だったことでしょう。

岡田文淑さんより講評ということで「この数時間は二人にとっては針のムシロであろうが、本当は明日から針のムシロが待っているのかもしれない。この二年間は貴重な体験であり、生きがいの分岐点になったともいえるのではないだろうか。講評めいたものは、先程から皆さんがそれぞれに言われましたので、言うことはありません」。

かくして三時間に及んだ発表会は、OB激励の言葉、留年証書の交付、贈る言葉などを経て無事終了。またいつか、お二人の歌「とんぼ」や「群青」を聞きたいと思います。どうもお疲れさまでした。

たくさんの人に
出会った、話した。

地域づくりやまちづくりは、終わりのない旅ですから、「さようなら」はいけません。再会を期して、中国語で「再見！」



辞令交付式で
神妙な面持ちの二人！

元気でね！

東京ディズニーランド失敗記

松山ＪＣ
今井　順一

この春休みに家族五人で東京ディズニーランドへ行ってきた。一才の次男を背負子にかつぎ、四才の娘と七才の息子の手を引いて、小雨降る中やっと入場門にたどりついたら、入場券を買うのに行列作って二十分。

まずはファンタジーランドの「イッツアスモールワールド」へ。ここも傘をさしての大行列。四十分近くも並んで、娘はもう「シンドク」なってしまった。仕方がないから、だっこ。ったくサンドイッチマンだよ、これじゃ。それでも、お馴染みのメロディーを口づさんで勇躍ボートに乗りこんだら、一才の息子は、もうすやすやおネンネ。

腹が減ったのでいざレストランへ。丁度昼時で大レストランも大行列。くたびれ果ててようやく食事にありつくまでに一時間。まだ一つしか見てないのに時計を見たらもう二時。

乗り物乗り放題のはずの一日パスポート券が泣いている。新婚時代に二人でいったあのディズニーランドとなんでこんなに違うの！

なんとか元を取り戻すべく、行列の少なそうなアトラクションを選んでは見てまわる。上の子がお友達へのお土産を買いたいというので、ここらが潮時と切り上げる。大混雑のファンシーショップで小物をいくつか買って満足そう。娘はもう眠たくなって背負子の主に。家内が次男をだっこしてようやく駅へ。ああ、しんど。

私は思った。今度の夏休みには、家族皆で、テントを張ってキャンプをしよう。ハイキングをしながらみちばたに咲く花の名前あてをしよう。滝のすべり台で遊んだ後は、釣った魚を料理して、ご飯を炊いてバーベキュー。焚き火を囲んでビールを飲んで、おしゃべりしながら楽しい食事。星空見ながら、寝袋にもぐり込もうっと。

島でイキイキ？

愛知県
中井　美智子

「何？」少し不安になって、開けた封筒から「舞たうん」。

「あっ、これ、豊田さんの仕事ね。」と、メッセージを読み、仰天！近ければ、「そんなァ」と駆け込みたかった。

私の島生活は、十数年前の沖縄本島。「島だから島国根性があって…。」と言われて住んだけれど、内地人とは天と地。私にとっては天国、天使でした。その大らかなる心の人たち。

在住中に再会した内地の友人は、「とてもいい顔している。」と言ってくれた。生活の便利さと不便さ。そこで、人の心が大きく違ってくるみたい。

十年以上の時が流れた今も、沖縄での生活を思い出すと胸が熱くなり、一度きりしか出会わなかった人も懐かしい。今は、すっかり便利になったらしい所で、残っているだろうか。あのやさしさ。

村おこし＝開発となりすぎてはいないだろうか。開発＝自然破壊自然破壊は人の心の荒廃につながっていく……。

私は、都会はおもいっきり都会に、田舎（島）はしっかり田舎にと思っている。そのどちらでもない中途半端な所ばかりだし、そんな所程、住みにくい。

村おこしといって、道はアスファルトになり大きく広げられ、少しだけど自然をくずす。でも、人間の立入った自然は、もう滅びる他ないのでは…。あるがままの自然が無くなれば、もう田舎は田舎で無くなる。かつて、西表島を旅した時に民宿のおじさんが「外から来る人はアスファルト道にしないでと言うけれど、住んでいる私達も便利に住みたいョ。」といった言葉がいつも頭の中を横ぎる。

人ばかりの中で生きている今の私にとって、島とそこに住む人は充分すぎる程にイキイキ生きていると思うのだが……。

私？沖縄にいた頃は、もっとイキイキと輝いていた。

地域づくり学んで三年 よもやま話ノート

第三話／「人間サイズの経済」を希う話

えひめ地域づくり研究会議　宮本俊一

［遊びの代表が海外旅行］

そのお話は、『お金と暇と遊びづくりが、村おこしの基本路線でした…』で始まりました。しかも「遊びの代表は、海外旅行ですかネ…、年寄りはハワイ等…。若者の人気はアラスカのキングサーモン釣り…。育児中の若嫁は北京か蘇州の短い旅でしようか…」と、いともコトなげな淡々とした語りなんです…。

もっとも旅行の話は、耕地面積三六〇ヘクタール、農家七〇〇戸の山村で、農家の農業所得を何処にも負けないものにされ…、若者が居着くばかりか、嫁不足など考えられない…とのお話の後で言われたんですが、パスポートの受給率が全世帯の一四〇％を越えると聞き…、私が見てきた農村では、とても想像できない優雅な風景だと思い知りました。

［ピシリッ！と通る人間サイド…］

もう…お判りですネ、そうです大山町（大分県）の矢幡治美先生のお話です。私が大山を知ったのは、例の『梅・栗植えてハワイへいこう…』でしたが、当時私は、「何をふざけたことを…」と、ニガ笑いをしただけでした。しかし先生は、『この路線で本物の農業構造改善ができた…』と説明されたんです。

お話は、「近在一の美人だった家内が、百姓をさせるうちに見る影もなく変り果てましてネ…、百姓をダメにするのは苛酷な農作業だと肝に銘じましたよ…」がプロローグでした。おかげで私は、先生のお仕事の根っこに、私たちが地域づくり活動の理想と希っている、『人間サイズの農業観』（先生はメンタル農業と呼ばれますが…）『人間サイズの経済論』が、ピシリッ！と通っているのに気づきました。聊か生意気でしょうか。

［一日四時間のメンタル農業…］

そこで、私流ですが、先生の農家指導を見直しますと、見事な頭脳農業なんですネ…。まず、経営の主体である…農家の営農は、夫婦で作れる小規模サイズにして、雇用労働や他の家族の労働は考えなくするんです。

しかも、夫婦の農作業は軽労働で、週休三日（一日四時間農業で計算…）が取れる設計です。つまり、小っさな農地の軽労働で、土地収益性の高い軽薄短小作物を選ぶ…『知恵の農業』を求められているんですね…。

それも単一作の危険を避け、しかも労働加重な農繁期を作らない工夫をした多品目栽培（先生はムカデ農業と呼ばれるが…）で、安定収入の「農家の月給制」を目指されるばかりか…、時代とともに高まる生活水準に見合う堅調な収入増を考えて、より収益性のある作目開発に取り組む…、創造の愉しさを味わう農家となることを希っておられるんです。

［人生を愉しく豊かにする仕掛け…］

つまり、これまでの農業のやり方では、金はできても暇ができない…。暇がなければ遊べない…。遊びがなければ知恵が生まれない…。知恵が生まれねば、金や暇を産みだす百姓はできない…。どうやら先生は、「暇」を「ゆとり」とし、「遊び」を「文化」に置き換えて…、『人生を愉しく豊かにする…』仕掛けを考えられていたようです。それが、米よりも軽労働で高収入な…『梅・栗植えてハワイへいこう…』だったんですよネ…。

とかく、儲ける時の「欲働き…」で、明日を生きる知恵づくりを忘れ、人間が見えない経済システムの仕掛けのままに、働きに働き詰め…、本当の豊かさや生きがいを見失いがちだった私たちには、大山の優雅な暮らしの風景は、まさに異文化ショックでした…。

［魅力の田舎町／湯布院…］

ともあれ、そんな『人間サイズ経済』の地域活動を考えさせられていた時です…。ご存じ湯布院町の中谷健太郎さんの講演速記が手に入り、本物はこれだ…と思いました。

私は、ここ七年ほど湯布院に興味をもってきましたが、中谷さんにお目にかかったのはただの一回、それも三十分ばかり人が話しているのを傍で聞き、二つばかり質問しただけでして、話は全く私流の理解なんですが…。

ご案内のとおり湯布院は、標高五〇〇メートルの山の中の盆地で、俗に言えば温泉はあるが、これと言っては何もない…、人口一万二千人のちっちゃな田舎町です。でも年間三〇〇万人もの観光客がくるという魅力の田舎町です。

加えて、湯布院なら無農薬野菜だろうとか…、少々高くても湯布院のパンならと売れゆき上々…。私らの懐では及びもつかない高額な宿が殆ど予約で一杯とか…。つまり湯布院というイメージの魅力なんですが、それは町の人びとがこの二十数年をかけ、各種のイベント等で創造し集積してきた…、時代を生きる高いレベルの文化的魅力なんですよネ…。

［若者三足ワラジの生き生き若者］

そして、その活動の中心的な役割をされてきた活動者のお一人が中谷さんですが、この方がご主人の旅館『亀の井別荘』には、客室が十二部屋しかないのに、九十九人もの従業員がいるばかりか、若い人たちがこの田舎の古い宿（失礼…）で、生き生きと働いているのだそうですから驚きなんですネ…。

中谷さんの話では、彼らが『三足のワラジ履き』だからそうです。その一足は、中谷さんの旅館経営の中で、各自が自分にできる新しい仕事を見つけ、経済的に最低限をペイする働きを始めることなんです…。

例えば、それはジャム作りとか、蕎打ちとか、その販売とか…等々なんですが…、二足目は、彼女のジャムならとか、あいつの蕎ならなどと、名ざしに近いお客がつき…、彼らの一人一人が、「社会的に認められる喜び…」を日々味わえることなんです…ネ。

そして三足目は、彼らが好きな…湯布院映画祭とか、湯布院音楽祭とか…等々の文化イベントと世話役を買ってでるので、みんなから「文化性を評価される…」ばかりか、それを通じて磨かれてゆく感性が…、彼らの商品の質を洗練し、その売り上げを高める…創造的愉しみの循環があることだそうです…。

［何も生まれない競争の原理…］

中谷さんは、『私の企業のアイデンティティは、私の旅館で何人の人が、快適に自分の能力を発揮して喰ってゆけるようになるか、そうした「場」に、私の旅館をできるか…ということでして…、私の町づくりは、こうしたチマチマしたことを続けてきた二十数年です…』と、結んでおられるんですネ…。

これは、人間を利潤追求の労働力としか考えない…近代経営学では、とうてい理解できない…「より人間らしい経営の成果」だと思います。そして私は、湯布院の町づくり活動の本質は「これだ…」と独断しましたが、同時にそれは、これからの地域づくり活動が目指す…、地域経営の原理『共生と連帯』のあり方が、見えてくるような想いでした。

しかも中谷さんは、『地域づくりでは、「競争の原理」からは何も生まれない…、ほかの地域との交流・融合の中から独自のものを生みだしてゆく、という流れを創って欲しい…』と言われます。肝心の要ですよネ…。

× × ×

お詫び…／あわて者らしく、前号の話に次の筆者ミスがありました。お許しください。

『第二話／少々頭が痛くなる話』は…↓

『組織を作らない組織活動の話』に…、

［町の人たちが愉しむ…地域活動］の項の、「かぐや姫まつり」を開き子供たちには…↓

子供たちがに…、それぞれ意味が違っていますので、お読み替えをお願いいたします。

創造について考える

LAT環境設計事務所
檜皮孝夫

時代は自分流です。創造的・個性的・感動的・誇りある活気・工夫する人生が今流の生き方です。マズローの欲求五段階説のもっとも上位にある「自己表現」の世界がそこにはあると思います。

マズローの欲求五段階

1 生理的欲求
食べもの、水などの欲求
2 安全欲求
安全でありたいという欲求
3 社会的欲求
所属・交際・仲間などの関係をもちたい欲求
4 自我の欲求
知識を身につけたい、尊敬されたいなどの欲求
5 自己実現欲求
自分の潜在力を開発し、夢を実現していく欲求

地域もまたその地域なりのアイデンティティを求めて動いています。「他の地域にもあるなら、俺達の地域にも欲しい」というのがこれまでの時代であったし、公共はシブルミニマム（市民生活の必要最小限の基準）という名のもとそのような行政をすすめてきました。しかし、今は「俺たちの地域は俺たちなりの生活があり環境がある。だから俺たちだけのものを造りたい」という姿勢に変わってきています。そこには、地域とささやかな幸せ、たとえば野の花や子供たちの声に喜びや誇りを持ちたいという自分なりの幸せがあります。他の地域に比べて恵まれない部分にあこがれず、我慢する心が心の奥底に「ぐっ」とあるのです。

創造的な物づくりは個性ある地域をつくっていくことになります。他の町との比較でなく、目的自立の時代にふさわしい「自分たちの町づくり」を自らずっと目指すこととなってくると思います。

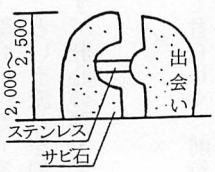
ここに示した物は、私どもの最近の試みの一つで、銘碑をとりあげたものです。基本的には石を素材として使うことが多いのですが、これは造園を志す者として、伝統的にも扱いなれていますし、未来永劫変わることがないという特質素材として扱っています。

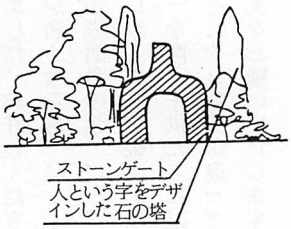
① 大三島美術館

この美術館は現代美術がテーマとなっているので、それがよく解るように、中に展示されている伊東深水の「鏡獅子」と野間仁根の「マリオネットの散歩」をアルミ板に焼きつけたものを埋めこんだものです。タイトルは地元の書家の方にお願いして書いて頂きました。

② 出会島

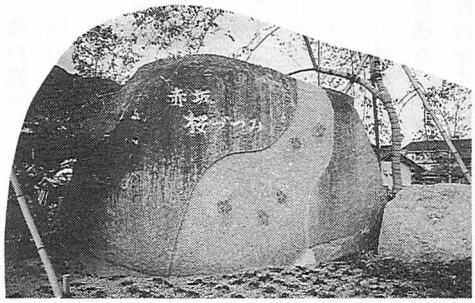
二番目は、島根県の出会島というところの銘碑です。人と人との出会い、一期一会を基本テーマとして考えたものです。





③ 砥部の赤坂桜つつみ

私は砥部町に住んでいるのですが、「いきいき砥部を考える会」で、講師をお願いした建設省の喜多課長さんに頼まれて、考えたものです。桜つつみのイメージとして川を水磨き仕上げとし、そこにサクラの象眼をしたものです。桜



つつみは建設省のモデル事業として実施されたもので、町も植栽を行うなどの協力をしています。また一つ砥部に良いところが増えたと地元では喜んでいるところなのです。

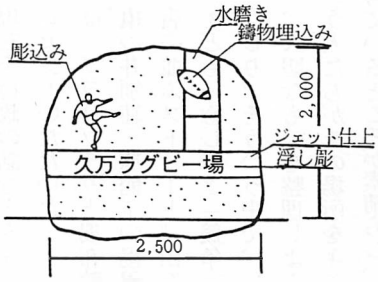
④　吉海町郷土文化センター

吉海町は海に囲まれた島なので、石にカブトガニとエビを彫刻しアクセントとして入れたものです。同じところに、石で卵をつくりました。すべての創作家は卵から始めなければならないということを意味し、この施設を使う若い人に頑張ってもらいたいとの願いを込めて造ったものです。この石の造形も地元の石屋さんが「そりゃ面白いなあ。ぜひやろうや」と言って意気に造ってくれたものです。

⑤　久万のラグビー場

これはまだ基本デッサンの段階ですが、石にボールを鑄物で造り、埋めこもうと言うものです。その他は石に彫刻するものです。このときには、併せて、詩をつくりィメージがより高まるようにしました。

大地よ開け
大地よ開け
我々は
今よりここに鍬をいれる

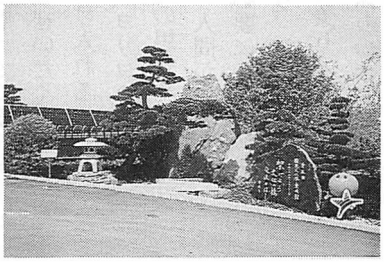


熱き思いを込めて鍬をいれる
まっ黒に日焼けた若者と
どろんこのジャージに
私達は町づくりの夢をかける
青春のエネルギーが
グランドへとけこんで
土はやがて練れてくる
若者の熱き血潮が
この大地に思い出を刻みこむ
ラグビーにかける
青春と人々の思いが
この大地に
今から歴史を刻みこむ
私達はその玄関に立っている
今から
その一歩を踏みだすのだ
一九九〇・四・一〇
久万ラグビー場起工式で

⑥　愛媛県出展庭園（国際花と緑の博覧会）

「石鎚山と瀬戸内海」をテーマとして、中央に高さ四メートルの青石でつくった石鎚山を置き、その前に青砂利でつくった瀬戸内海と橋を表現しました。また本年秋に実施される国民文化祭をPRするために、マスコットマークである「ミカちゃん」を置きました。

これらの物は地元の職人の方に協力をお願いしたわけですが、このような造り方には不安な面もあるのですが、打ち合せを重ねていくとそこには既製品にはない感動が生まれます。努力が報われます。地元の技術と私達の知恵が結集し、そこに新しい思いが生まれます。そして小さな満足が仕事にかかわりあった人たちの中に残ります。そんな仕事を今後もしていきたいと私は思っていますし、またそういう努力をすべきであろうと思います。



癒しの里がどこにあるんだ

津島町
宮本　清幸

津島町役場地域活性化対策プロジェクトチーム。メンバー十六名。「何をしているの」と聞かれるのが一番辛いグループである。メンバーの中に女性が一名でもいれば何か返しようもあろうかといったところ。だからという訳でもないが、いざ研修ツアーに出掛けるとなると、長年の職場の「くせ」が出て、「効果」が先に立ち、それに振り回されて、帰って来た時には「疲れ旅」。

今回のツアー（三月十六・十七日）の計画は、はじめは行先も由布院ではなく、手堅く構えていたが、メンバーの中に「遊びに行こう」という声が出て、「効果」が「遊び」に押されての十二名の旅立ちとなった。

だから、帰ってからの上司たちからの言われようは、まったくの予想通り、「プロジェクトチームは旅行をする集まりかなどと言っている人がおる。もう少し何かかたちになるようなことをしたらどうか。言い訳が立たんぞ。」

それでも、チームの中では、いや私などは「いい旅だった。遊びが効果に勝つ旅とはこんなものなんだ。それに、疲れ旅などと言ったら、会っていただいた人たちにそれこそ申し訳が立たないではないか。構えた旅、効果の旅は、会ってくれる人にとって迷惑な客以外の何ものでもないんだ。」などと満足している。

あれほど有名な「由布院」が、何をしているのかわからないわれわれを手紙ひとつで、きちんと迎えてくれる。一ヘクタールに余る亀の井別荘の中は一つひとつの建物が癒しの里。そのうちのひとつに案内されて、メンバー十二名は「中谷健太郎」に頭をかかえて一時間の受験勉強。「歴史をさかのぼれ。それもちょっと前までではダメだ。遠いところまでさかのぼれ。九州島への旅がはじまる。九州島の旅のはじまりは由布院だ」

田井修二さんからは音楽祭の話などをいただいた。ぜいたくにお金をかけて、残るものが少ないわがコンサートのことなど出せる話ではない。夜は緒方重成さんに宿の千由家（ちよしや）までおいでいただき、湯布院の現在を行政の話などをまじえてプレゼントいただいた。

翌日は、ブラリブラリと湯布院見学。亀の井別荘・旅館玉の湯界隈、お店の並ぶストリート。由布院といえども「癒し」と「競争」の入り交じり。そういう中で、いいこと、大切なものを整理しようぜという人たちがその場所をキチンと得ているところが素晴らしい。

最後に、「癒し」の真髄と、案内された部屋に住みついた掛軸を紹介して結びとしよう。

「競争」や、「戦い」や「管理」の原理のない町。競争し、戦い、管理に疲れた人たちが、「癒し」を求めてこの町にやってくる。「歓楽」や「ぜいたく」や「貧欲」を受け入れることのない町。「ヨリヨク」や「ガンバリ」の思想や仕掛けがない町。人間が生きてゆくのに、必要にして充分のものがあり、たっぷりの空間と、そしてたっぷりのホスピタリティがある。それで充分だ。

壷中天地有

⇦ 亀の井別荘内のおみやげたち

Town タウン

コン通信ネットワーク

拡げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 11

Human Communication & Network

ECCC

Ehime Computer Communication Club

えひめコンピューターコミュニケーションクラブ

舞タウン愛読者の皆様はじめまして！。

やっぱりドタン場にならないと書けなかった…。いえ、私の悪い癖でして、締切を明日に控えて今焦って書いてます。（苦笑）

早いもので、私がECCCへ入会し、TOWNタウンでパソコン通信を始めてもう四年が過ぎました。通信歴から言えばやや古い組になるのかな？って所でしょうか。

さて、前回のお話で、パソコン通信をするための、必須アイテムが判りました。

ではパソコン通信で何が出来るのでしょうか？。

新聞よりも早くニュースを知る事？、ホームトレード？、オンラインショッピング？……。

確かにこうした情報を居ながらにして得る事が出来るのも、パソコン通信の面白さです。そしてこうしたサービスは、大手の商用ネット等で得る事が出来ます。

しかし、TOWNのような地域に根ざした小さなネットは、情報の収集よりも、人と人とのコミュニケーション、異業種の人達とのネットワーキングの場であって、私が楽しんで来たのも、その「友達の輪」作りでした。

パソコン通信は、マスメディアの様に片通話ではなく、双方向のメディアであり、電話のように一対一のメディアではなく、一対多のメディアでもあります。

ゲームとワープロとしてくらいしか使用していなかった自宅のパソコンから、いろんな人達の意見やおしゃべりを読む事が出来、また自分も積極的に書込んで行く事で自分の意見や気持ちをみんなに聞いて貰う事が出来るのです。

自分のパソコンの向うには大勢の仲間がいつも繋がっている感じです。

初めて緊張しながら書込みをした時、すぐ気持ちよく迎え入れるコメントを返して貰い、自分の気持ちに何人かの人が反応してくれた事がとても嬉しかったし感動的でもあって、ドンドンと通信の世界へのめりこんでいきました。今でもあの時の感激は忘れられないですねぇ。

それから書込みへのとっつき易さという点でも、新聞等への投稿とは違って、どんなにつたない文章でも、校正にかかったりボツにならないという気楽さがあります

書込まれたメッセージは、全部まちづくりセンターにあるホストコンピューターに蓄積され、いつでも、何度でも取り出して読む事が出来るのです。

それも時間に拘束される事なく自分のきままな時間に、余暇を利用して楽しむ事が出来るという訳です。

「TOWNタウン」という名称からも、惑いはお気付きかも知れませんが、TOWNの中はひとつの架空の街があります。そして多くの、これまた架空の店が並んでいるのです。

そのお店も、気軽に入れる喫茶店があれば、専門品を扱う専門店もあります。

そして話題も、店の雰囲気に合った感じで展開されています。

例え架空の街ではあっても、TOWNに活気があれば、それは一つの町作り！。その辺りにまちづくりセンターとの接点もある訳です。

ズブの素人であった私も、いつしかタウンに店を構え、しがないサラリーマンも、ここでは一件の店主で楽しませて貰ってます。

余暇を利用しての気楽な通信のはずが、自分の持ち時間はほとんど通信に注がれ、家族の冷たい視線を時折背中に感じるというのが皮肉と言えば皮肉なのですが…。（苦笑）

＜岡　本＞

御荘湾立て干し網の魅力

御荘町　金原　徹

今日では全国津々浦々で多くのイベントが開催されている。

人々は、それらのイベントの内容を吟味して自分の気持ちとマッチするものを選定し参加するはずであります。

比較的その内容も参加者の状況もしっかりとしていると思われる催しは、必ずと言って良いほどその地の根ざした伝統に培われたものが多いことに気づきませんか。

すっかり関西の初夏の風物詩になった「御荘湾立て干し網」も古く明治の中頃から、一つの漁法として行われていたことが記されていますし、人々の楽しい海のまつりとして今日まで引き継がれてまいりました。

途中で一時中断することもありましたが、昭和六十二年、多くの人々の熱意で復活することができました。

内容はまことに簡単で湾の中七〇〇メートルを網で仕切り巨大に自然の生けすをつくり、その中に入って逃げまわる魚をつかまえる原始的なあそびなのです。

今や規模的にも全国一と言われるこのイベントが今の時代にどうして多くの人々の関心がもたれるのでしょう。

少し時代を逆のぼると日本中どこへ行っても美しい川の流れがありました。たとえ小さい小さい小川の中にも川魚やカニなどがたくさんいた思い出があります。

金原　徹さん

子ども達は時の過ぎるのもすっかり忘れて夢中になってあそびました。そして、つかまえたときの感激は言葉に表現できないほどうれしかったものです。

立て干し網の単純で原始的なあそびは大人にとって前述の幼いときの感動を味わうことができますし、子ども達は今の時代にも共通する童遊びを満喫できることではないでしょうか。

天然の魚と貝のみで運営できていた旧前とはちがって参加者の急増と天然魚の減少によって最近では相当量の魚や貝の放流をいたします。本年も魚類二五〇〇匹、アサリ一〇万個を放流して、対応をいたしました。

結果多くの魚を射とめた人、全く魚が手にかからなかった人など様々でしたが童心にかえっての楽しさは全員で味わえたと思います。

参加者一万八千人を分析してみますと、県内では中・東予の方が非常に多く、高知県に次

いで九州・四国・近畿地方からの参加が見られるイベントに成長してまいりました。

昨年からは南予名物の闘牛大会とドッキングをさせ、趣のちがう二つのイベントを同時に開催する例は、外には無いと思われます。

海を柱としたイベントですから、ふるさと市でも漁・農・商業の青年部等が地元の特産品の直売をして、新鮮な魚や青果のＰＲに終日努めている姿が印象的でした。

年々さかんになっていくこの立て干し網を通じて今人々からこの海、この川を汚したくない。汚させない運動が急速に盛りあがっています。

今後も立て干し網をつづけていくためには、この運動の成否にかかっていると言っても過言ではないでしょう。

「美しい水を蘇らすためには、行政の力だけでは絶対に不可能」と言われる柳川市の広松氏の声が私共の耳から決して離れません。

このもっとも単純で原始的なあそびで童心に酔える立て干し網は、これからも長い歴史をきっと刻んでくれるにちがいありません。

島あれこれ…

▲日本全国には 7,000近くの島がある。そして、その中の 435の島々に 160万人が住んでいる。日本全体からみて島の占める割合は、面積が 2.8%、人口は 1.3%にしかない。

ここで島に関するいろいろなデータをもとに、島の勉強会を少し。

世界の島面積ベスト10

	島名	面積km²
1	グリーンランド	2,175,600
2	ニューギニア	771,900
3	ボルネオ（カリマンタン）	736,600
4	マダガスカル	590,300
5	バフィンカナダ	512,200
6	スマトラ	433,800
7	本州（日本）	230,722
8	グレート・ブリテン	216,800
9	セレベス（スラウェシ）	179,400
10	ニュージーランド南島	150,525

日本の島面積ベスト10

	島名	面積km²
1	佐渡島（新潟県）	857.2
2	奄美大島（鹿児島県）	719.6
3	対馬島（長崎県）	702.0
4	淡路島（兵庫県）	592.9
5	天草下島（熊本県）	573.1
6	屋久島（鹿児島県）	500.6
7	種子島（鹿児島県）	447.6
8	福江島（長崎県）	335.8
9	西表島（沖縄県）	284.4
10	徳之島（鹿児島県）	248.5

愛媛の島面積ベスト10

	島名	面積km²
1	大三島（大三島町・上浦町）	64.6
2	大島（宮窪町・吉海町）	43.3
3	中島（中島町）	21.9
4	伯方島（伯方町）	19.5
5	岩城島（岩城村）	10.8
6	興居島（松山市）	8.9
7	弓削島（弓削町）	8.8
8	怒和島（中島町）	4.9
9	睦月島（中島町）	3.9
10	佐島（弓削町）	3.7

▲色にちなんだ島名

色	島名
青	青ケ島（東京都）
	青　島（愛媛県）他に1島
白	白石島（岡山県）
黒	黒　島（山口県）他に5島
藍	藍ノ島（福岡県）
赤	赤　島（長崎県）他に1島
黄	黄　島（長崎県）

▲数字にちなんだ島名

数字	島名
1	壱岐島（長崎県）
2	二神島（愛媛県）
3	三宅島（東京都）
6	三角島（広島県）
	六口島（岡山県）
	六　島（岡山県）他に1島
8	六連島（山口県）
9	八丈島（東京都）
	八　島（山口県）
100	九　島（愛媛県）
	百　島（広島県）

▲同名の島

	島数
大島（おおしま）	13
黒島（くろしま）	6
高島（たかしま）	5
馬島（うましま）	3
松島（まつしま）	3
豊島（とよしま・てしま）	3

▲日本最端の島

最北端	北海道・弁天島	45° 31′ 30″N	141° 55′ 24″E
最南端	東京都・沖ノ鳥島	20 25 18N	136 04 54 E
最東端	東京都・南鳥島	24 17 00N	153 59 12 E
最西端	沖縄県・与那国島	24 26 36N	122 56 00 E

――人の心は変わりやすい。『心』という字は、点と線でひとつの文字をつくっている。それは、まとまっているようで、実はバラバラ……。今日はひとつであるようで、明日はわからない人の心は変わりやすい。

他人の言葉にまどわされ一瞬くずれる『心』の文字……。それでも変えろと言われて変えられぬのもまた、人の心――

内容についてのご意見や活動内容についての記事など気楽にお寄せ下さい。

「舞・たうん」編集係
二人のMs、（丹下・久保田）まで。
〒七九〇　松山市道後一万一の二
㈶愛媛県まちづくり総合センター
TEL　〇八九九（二五）五五五七
FAX　〇八九九（二五）六六八〇